松下教育研究財団の実践研究助成による

学校研究「継続・発展」の手引き

はじめに　松下教育研究財団の実践研究助成による学校研究を「継続・発展」させよう！

今日，多くの教師たちが，子どもたちの学力の向上をめざして，同僚とともに授業改善に取り組んでいます。そうした学校を単位とする実践研究（以下，学校研究）を充実させるための術として，松下教育研究財団の実践研究助成があります。これを糧にして，多くの学校が授業改善やカリキュラム開発を推進してきました。しかしながら，その一方で，こうした類の実践研究を継続・発展させることの難しさが指摘されてもいます。例えば研究の推進役が異動してしまった，指定を受けたので異なるテーマで取り組まざるをえない等，学校研究を継続・発展させるための障害は少なくありません。

どうすれば，学校研究を着実に継続・発展させることができるのでしょうか。その秘訣を，この手引きでは紹介しています。まず，平成19年度に，2つの小学校の研究主任に，次年度以降の実践を強く意識してもらいながら，所属校の当該年度の研究を活性化するためのアクションを繰り広げて，それを月ごとに整理してもらいました。次いで，筆者が，過去に松下教育研究財団の実践研究助成を受けた学校を訪問して，継続・発展のための工夫をヒアリングした結果をまとめて掲載しています。これらの情報は，学校研究を継続・発展させたいと考えている研究主任にとって，よき道標となるでしょう。また，最後に載せた「学校研究の評価基準」は，研究を継続・発展させるための準備状況やその推進状況を自己点検する際のツールとして有用です。さらに，コラムでは，全国の中堅教師に所属校（当時）の学校研究を盛り上げるため工夫を紹介してもらっていますので，それらもご味読ください。

なお，実践研究の企画・運営について詳しく学びたい場合には，拙著『教員が磨き合う学校研究』（ぎょうせい，2006年）をご覧ください。また，財団の支援を受けて編者らが作成・公開している「学校研究推進に関するQ&A」（https://meru-maga.mef.or.jp/qa/qa_form.php）にアクセスしてください。

平成20年3月

「手引き」編集責任者：木原俊行（大阪教育大学・教授）

目次

はじめに----------1
1．学校研究「継続・発展」に向けたアクション例1----------2
コラム
①研究授業後の協議会を盛り上げるために----------14
②同学年の若い教師の取り組みをサポートする----------15
2．学校研究「継続・発展」に向けたアクション例2----------16
コラム
③若い研究主任を支えるための工夫----------28
④（研究主任でなくても）授業研究会を活性化するために何ができるか----------29
3．学校研究「継続・発展」の実態分析－実践研究助成校を追跡して－----------30
コラム
⑤異動したばかりの学校で実践研究推進のイニシアチブを果たす----------35
4．学校研究「継続・発展」の評価基準----------36

4．学校研究「継続・発展」の評価基準－松下教育研究財団の実践研究助成校の場合－

大阪教育大学　木原俊行

以下の表は，学校研究の「継続・発展」を点検・評価するための基準表である。松下教育研究財団の実践研究助成校における学校研究の場合を想定して，作成した。表１は，助成期間中に試みるべき継続・発展のための布石である。そして表２は，助成期間終了後に起こすべき，継続・発展に必要とされるアクションである。

表１　学校研究の評価基準（助成期間中の継続・発展への布石）

項目	レベル１	レベル２	レベル３
	努力を要する	おおむね満足できる	十分満足できる
１．研究計画の具体化	授業研究の日程等が明らかになっていない	授業研究の日程等が明らかになっている	翌年度の計画等もある程度構想し，計画が重層的になっている
２．実践のスタート	１学期に，計画に基づいた実践が生まれない	１学期中に，計画に基づいた実践がいくつか試みられる	１学期中に計画に基づいた実践が試みられ，それらを教師間で共有する仕組みも開発されている
３．研究授業の実施	一部の教師しか研究授業を実施していない	多くの教科や学年で授業研究が試みられている	複数の研究授業の知見を比較検討する仕組みを整えている
４．研究授業の事後協議会の企画・運営	意見交換が盛んでない，あるいは一部の教師等に限られている	数多くの意見が出され，それが整理されている	観察者自身の授業改善を考察する機会が設けられている
５．外部評価の導入	外部評価の取り組みが皆無である	他校の教師等が授業研究会に参加できる	授業公開を含む研究発表会を開催している
６．研究の評価	研究の視点と方法を評価する機会や仕組みが設けられていない	研究を総括する機会が年度末に設けられている	年度末以外（例えば夏休み）にも研究を評価する機会がある
７．報告書等の作成	ごく一部の教師で作成されている	複数の教師によって作成されている	学校独自で研究紀要等を作成し，報告書が，その要約版となっている
８．次なる実践的リーダーの育成	次年度以降に研究をリードする人材が見定められていない	若い教師に研究推進グループにあえて参加してもらっている	次の実践的リーダーたる人材に意図的に重要な役割を果たしてもらう

表２　学校研究の評価基準（助成期間終了後の継続・発展のアクション）

項目	レベル１	レベル２	レベル３
	努力を要する	おおむね満足できる	十分満足できる
１．研究テーマの再構成	前年度のテーマと今年度のものがなんらつながっていない	育成を図る学力等にテーマの連続性を確認できる	テーマの連続・発展性が根拠をもって示されている
２．研究組織の再構築	研究組織がなんら変わっていない（安易に変えられている）	研究組織が部分的に変わっている	研究組織の構造化が進展している
３．実践の維持・継承	昨年度の実践が試みられていない	昨年度の実践の取り組み数が増えている	昨年度の実践のバージョンアップが進んでいる
４．学校外への普及	昨年度の実践を他校等へ普及しようとする意思が見あたらない	論文執筆やホームページでの紹介などに着手している	地域の研究会等で成果を報告したり，成果物を配布したりしている
５．報告会（8月）における報告内容	報告書の執筆内容に限定されている	報告書の執筆内容に，助成期間中の他の取り組みを加えてレポートしている	助成期間中の取り組みと助成終了後の取り組みを統合的にレポートしている
６．さらなる申請	実践研究助成へのさらなる申請を検討していない	実践研究助成へのさらなる申請を検討している	様々な助成への申請を複眼的に検討している